

# 淨土

1988—3

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行  
昭和二十四年四月二十八日（澤柳省 特別授承認雜誌）第三二五号  
昭和六十二年二月二十五日印刷  
第五十四卷  
三月号



### 三月の秀句

雪解水重なり流る顔の前

彼岸会を燃えて居るなり大香炉

こじれたる会議も終り春休み

金子 兜太

原 石 鼎

土屋 梅村



# 三月号



是のもしもろの鳥、屋夜六時に、  
和雅の声を出だす。

——『阿弥陀經』

## 目次

### 法 話

お彼岸に思う……………土 屋 光 道……(2)

### 《彼岸会随想》

「節目」のある人生を……………岡 本 宣 丈……(9)

### = 仏教童話 =

ひがんえ

——お彼岸行きの電車——……………布 村 哲 哉……(14)

### 東西宗教の交差点〔2〕

墓相さまざま……………福 嶋 瑞 江……(20)

### ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

道瀬幸雄氏逝去……………(27)

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺

海と山の狭間で

——唱歌と童謡(2)——

……………木 下 隆 一……(28)

### ◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第45回

……………寺 内 大 吉……(35)

親 縁 の 駅 路

挿絵 松澤 達文

表紙絵 小林治郎画

法

話

## お彼岸に思う

つちやこうどう  
土屋光道

(大正大学講師)

### 一 先祖の遺産

春のお彼岸を迎えました。彼岸桜を初めてして、やがて桜前線も北上して来ます。

「寒さ暑さも彼岸まで」と申します。

長い寒気も去って、暖い陽光に天地が包まれる春のこの季節感、何度味わっても何とも云えない嬉しさであり、まさに生命の張る喜びです。

外国にないこの敏感な季節感覚こそは、何年何百年来、日本人の心性を形成し、文化

を特色づけて来た大切な遺産です。

しかし、最近、冷暖房設備が整い、ハウスの野菜が一年中食べられるようになりました。つい昔は国民の九〇%以上が農耕にたずさわっていたのに、今や総人口中、専業農家は数%に激減し、自然を離れて都市集中化が急速に進んでいます。そこに私どもは、次第に季節に鈍感になって、先祖が持ち合せたあの鋭敏な感覚を忘れ、ひいては自然への豊かな情感、生命への感動を喪失しようとしています。これは日本の精神文化にとって由々し

き問題です。もっと心して我々の先祖が四季折々に、その魂を託し、共に守り伝えて来た国民的祭日の内容をよく理解し、新しい意味を盛って更に子孫へと伝承して行かなければならないと思います。

## 二 立春から春分へ

さて、我々の先祖が春に寄せる心、即ち、春を待ちわび、春の到来を喜ぶ気持は、今日想像するより遥かに大きく深かった。それは春の前の冬というものが、生きてゆく者にとって、まことに耐え難い季節だったからです。

寒い冬の厳しさ、それは草木はもとよりあらゆる生物にとって生命の危機の季節です。隙間から風雪が吹込む掘立小屋、粗末な麻のボロで身体をくるみ（絹物は上流階級だけ、棉わたや木綿は室町時代以前にはなかった）、飢えをしのぐ食物も底をつく。病んでも医薬はおるか休む

ことすら許されない。暗くて寒い長い夜中に何度も何度も目覚めては、「春よ来い、早く来い」とどんなにか待ちたがったことでしょう。この冬の我慢がきついだけ、春到来の喜びが一層大きかったに違いありません。

ところで、今日の我々は、明治六年以来、いわゆる太陽暦を使っていますが、それ以前は旧暦でした。それは太陰太陽暦であって、月と太陽との両方を考え合せた暦を用いていたのです。

日常生活は月のみちかけの周期を一月とし、一年を大月（三十日）と小月（二十九日）とに配列した。ところが、それだと一年は三五四日になり、太陽年に比べると約十一日短くなる。このため、年の始めは次第に季節より進んで、三十三年で一年進んでしまうことになる（イスラム教圏ではこの太陰暦を今日でも使用しています）。そこで閏年を置いて調節するよう

になったが、太陰月はやはり季節とはなれてゆく傾きがあり、暦日と気候のずれは、三十日以上にはわたらないにしても、十日から二十日ほどのずれが生ずるので。

しかし、農耕民族にとつては、季節を正確にとらえることは重要であり、このずれは、農耕や播種、ひいては収穫に大きな支障となつたのです。

そこで、自然の季節にも合うし、しかも何年経つてもずれることのない基準となるのが、太陽の運行の中で一年中で昼と夜の長さの等しい日、すなわち「春分」と「秋分」であり、また日照時間の最も長い日と短い日、すなわち「夏至」と「冬至」でありました。こうして考え出されたのが、中国で成立した「二十四節気」でした。

正月 (立春、雨水)、 二月 (啓蟄、春分)  
三月 (清明、穀雨)、 四月 (立夏、小満)

五月 (芒種、夏至)、 六月 (小暑、大暑)  
七月 (立秋、処暑)、 八月 (白露、秋分)  
九月 (寒露、霜降)、 十月 (立冬、小雪)  
十一月 (大雪、冬至)、 十二月 (小寒、大寒)

これは、日本にも早く伝わつたのです。

そこで何より大事なことは、「立春」から春がはじまり、それがまた年の始まりでもあつたことです。(漢代以前は冬至が一陽来復の年始でした。またグレゴリー暦も冬至を年始とし、太陽復活、不敗の太陽の祭りがイエス誕生のクリスマスともなり、この冬至を起点として天地創造の七日間の後の聖日を正月元旦と定めたのが、今日行われている太陽暦です。)

立春が年始正月であつたから、年賀に「賀春」とか「初春のお慶び」と迎春の辞を書いたのです。(旧暦では立春を含む朔望の朔を元旦とする。今年は二月十八日。)

立春とは、どこやら春の気配がただよいは

じめる意味です。その前日が「節分」で冬の寒さが下りつめて、いよいよこれを境いにして陽気が上向きに転ずる日で、立春を過ぎれば、「余寒なおきびしい」候であります。冬至年始が日照時間という光りを基準にしたのに対して、立春年始は気温という暖気の転換点に春を求めたと云えましょう。

こうした一年で一番寒い時に、春の到来を喜んだのであります。しかしよく見れば、あれほど固かった蕾もふくらみ、新しい芽もはや新しい生命の働きを開始している。そもそも「生」という文字は象形文字の土中より双葉が芽生えた形です。わが国で誰もがお互いに「お目出とう」と挨拶するのは、目玉が出るのではなく天地自然にいつしかみなぎる春気にうながされて発芽する「お芽出とう」の意味であります。その芽がふくらむのが「めぐむ」で、それこそ天地の「めぐみ(恵)」で

あったのです。

今日「お目出とう」という挨拶を、誕生日とか成人式や結婚式に相手に向かってだけ云いますが、お正月だけはお互いに云い合います。それは、この春の生命のよろこびを共に受け、新生命をお互いに恵ぐまれた、その天地への感謝と讃嘆であり、生かされているという実感、その感動の表白だったのです。最近のお正月には、段々とこの一緒に天地に充ちて来た春気のことほぎ祝う気分が薄れてしまったのではないでしょうか。

そして、この立春年始の喜びが、いよいよ確かなものになった、その春の盛りが春分であります。そこに立春―正月―春分と高揚する一連の意識があった。

瑞々しい生命の充実感、危険な冬を脱した安堵と感謝、新しい農耕作業の始動の忙しさの中に、生命の根源たる太陽と先祖を祈った。

そうした民俗、年間習俗の土壤の上に仏教の種が定着して、やがて彼岸という仏教儀礼の形で定着し伝承されたのです。

### 三 浄土教の流布

さて、彼岸という言葉は、梵語の波羅蜜多 Paramita の音訳で、凡夫が煩惱に繫縛されて迷うこの汚れた娑婆世界を彼岸といい。生死の海を越えて、真実清浄の涅槃の岸に達することを到彼岸と云う。仏教の到彼岸には本来季節はないが、我々の先祖はこの春分の日と、うだるような酷暑から爽かな涼しい秋への転換に当る秋分の日を選び、その前後三日づつ、計一週間を彼岸会とし、専ら仏事法要を営んだ。これはインドや中国にない日本独自の行事であります。

その起源には諸説あるが、仏教行事として各寺で早くから不断念仏や巡礼、巡拝が行わ

れ、先祖供養が営まれた。中でも有名たのは大阪四天王寺の彼岸会で、西門念仏と呼ばれ、その西門が極楽の正東に対するから、春秋の彼岸にこの間から落日を拝すれば、必ずや極楽に往生出来ると信じ、平安末期には上皇や公卿衆が陸統として集り、院や坊に宿をとって念仏した。後白河上皇も毎年摂政関白等を伴として詣でたことが『玉葉』その他の日記に出ている。これは『観経』に説く「日想観」にも当り、善導大師の『観経疏』には、春、秋分には、「その日正東より出でて直西に没す、阿弥陀国は日没処に当りて真西に十萬億刹を超過す」とある。阿弥陀仏の極楽の所在を衆生に示して、念仏往生の結縁を得さすという。また、この日は寒からず暑からず修行に最適な時節であり、昼夜の長さが等しく、太陽が真東より昇って、真西に沈む中道の時とも説く。ともかく、忘れてならないの

は、日本の浄土教の民間伝播に果した彼岸会の役割はまことに大きかったことです。

#### 四 心田を耕す

いずれにしても、仏教行事としての彼岸会の受け皿には、農耕民族としての我々の先祖の宗教意識、特に春を迎えた喜び、生命への畏敬があつて、その根元である太陽と祖先への感謝讃嘆の行事があつたのであります。

我々の祖先が、この農作業開始あるいは収穫前のまことに一日とても暇の惜しい時に、わざわざ前後一週間を聖日とし、太陽を拝み先祖を供養し、念仏を称えて往生極楽を發願する彼岸会を年中行事として伝承して来たことは、まことに素晴らしい智慧であり、極めて質の高い民族的文化遺産と云えましょう。

原始經典に『耕田』と題する著名な経があります。

一日、朝はやく、世尊は、衣をつけ、鉢をとり、托鉢のために、ある一人の婆羅門の仕事場に趣かれた。丁度種まきの忙しい時で、かの婆羅門は、人々に食事を分配している折であつた。釈尊はその場にいたり、その傍に立つた。それ見て、かの婆羅門は云つた。

「沙門よ、われらは自ら田を耕し、種をまき、しかる後に食する。沙門よ、なんじもまた、自ら田を耕し、種をまいて、しかる後に食するがよい」

これに對して、世尊は答えて云つた。

「婆羅門よ、われもまた、耕し、種まく。耕し種まいて、しかる後に食するのである」だが、世尊は鋤も持たず、牛も引かず、しかも耕し種まくという意味を、かの婆羅門は解することが出来なかつた。

「沙門よ、なんじは、〃われもまた耕し、種まく〃というが、われらはいまだかつて、

なんじの耕す姿を見たことがない。なんじの鋤うはいづくにあるか。なんじの牛はどこにいるか」

かく問われた時、釈尊は言った。

「婆羅門よ、信仰はわが播く種である。智慧はわたしの耕す鋤である。身において、口において、また意において悪業をまもるは、わたしの田における除草である。精進はわが牛であって、行いて退くことなく、行いて悲しむことがない。かくのごとく私は耕しかくのごとく私は種をまいて、甘露の果を収穫するのである」と。

思うに、今日の日本はまことに豊かになって、農業も自由化を迫られ、いよいよ減少傾向にあります。何千年と培つちかわれて事た先祖の心は失われ、伝承されて来た彼岸の行事も形骸化しようとしています。

しかし、荒れ果てた、我が心田を耕して、それを福田ふくでんとし、よき信仰の仏種を播いて、悪業を除草し、精進に勤めて、よき収穫を果さねばなりません。そしてその仏性を開発し、仏種を成長させるには称名念仏の中に如来様の無量光明と、無量寿命のお育てによらなければなりません。

今こそ、祖先の残した、この彼岸に托した願行を再生復活し、彼岸会を仏教本来の意味に新生させる好機ではないでしょうか。

今の日本には、物質文明はあっても、精神文化はなきに等しい。文化（カルチャー）の原語は、まさに「耕す」ことです。今こそ魂の荒田を福田に変える彼岸会にし、誇るべき先祖伝来の美風を伝承して行きたいものです。

春彼岸はるだ菩提の種を播く日かな

この歌は、今もなお深い意味を持っているようです。

## 「節目」のある人生を

人生にはいろいろな節目がある。その節目を、いかに乗り切るか、いかに気持を切り換えるかで、その後の人生が大きく変ることさえある。

一般的には、入学、進学、卒業、就職、結婚などが挙げられるし、継続的なものとしては、元旦、誕生日、年度がわりなどがある。さらに個人的な節目を設け、それを気持の切り換え時としている人もあると思う。

この観点からすると、私の節目は春の彼岸である。そして、すでにこの節目を三十五回

おかもとせんじょう  
岡本宣丈

(東京・文京区法蔵院住職)

以上も経たことになる。

昭和二十六年三月十四日、父達成は輪禍で不帰の人となった。轢き逃げ事故であった。脳内出血のため即死の状態であった。当時、小学校の二年生であった私は、父の死をどのように受けとめるべきか理解できなかった。葬儀が終え、弔問の人が帰り、平生に戻った。そして、春の彼岸を迎えた。母に手を引かれ墓参した。埋葬したばかりの父の墓は土の色が辺りに和まず、異様に映った。その時、母の嗚咽の声が静寂を破った。そして、



「なぜ、死んでしまったの、どう生きていけばよいのか、教えて！」

という、母の声が聞えた。私がある場所をどのように繕ったか覚えがない。ただ、

「本当に頼むわよ、皆で助け合って、残った者が互いにがんばるしかないんだからね」

と、私を慰めつつ、自分自身にいい聞かせていた母の言葉が、今も耳底に残っている。そして、春の彼岸を迎えるたびに、その意味合いが変わったり、増幅したりして、生きる支えとなっている。こうして春の彼岸は、私にとって性根を入れかえる節目となっている。

モータリゼーションの発達は目覚ましいものがある。より速く、より快適にと、自動車各メーカーは、次々と新型車を投入し、購売意欲をくすぐっている。保有台数も、セカンド・カーを購入する時代となり、大幅に増加し

て、街には車があふれている。まさに車なくしては世を過ごせない時代となった。

そのかげで、人生が暗転する人が増加している。いわゆる交通戦争の犠牲者である、事実、昨年も一人に近い人が輪禍で逝っている。一瞬にして愛しの子の、大黒柱の、兄弟姉妹の尊い命を奪い取られ、悲嘆にくれる例が日常ごととなってしまった。悲しむべき事態だ。

行政当局も、その対策に頭を痛めている。現状の規制する方式から、車がスムーズに走れる方式へと、法改正に取り組んでいると聞く。いずれにしても深刻な問題だけに、抜本的な対策が立てられるよう期待したいものだ。

私自身も、毎日車の世話になっている。勤務している大正大学埼玉校舎は、県南に位置し、都心から三十五キロ余りであるが、交通

事情が決して良くない。そのため、ついつい車での通勤となっている。往復三時間余りかかり、すでに六年間通っているが、オートナードライバーとしては、利用頻度が多いほうであらう。

通い慣れた道路ではあるが、日々交通量は異なるし、いろいろな条件も、刻々変化する。肉体的な疲労はあまり感じないが、精神的な疲労は、かなり蓄積されたように思えてならない。事故は、多分こうした肉体・精神両面のバランスを失ったときに起るのではないだろうか。よく「出合いがしら」といわれるが、これとて注意力が散漫になっているがための事故といえる。

一方では、性能の飛躍的な向上に、運転技量がついていけない面もある。埼玉校舎では、その立地条件から学生の車やオートバイでの通学を認めている。現在、一年生七百余人が

在籍しているが、このうち約二割の学生がその利用者である。とくに夏休み以後、その数は急増する。休暇中に免許を取得したためだ。

この時期は、頭を痛めるシーズンとなる。機会あるごとに「あまりスピードを出すな」「運転技量を過信するな」と、学生たちに声をかけることにしている。幸い今年度は大事故がないが、この六年間で三人の学生が落命している。いずれもオートバイで、一件は無理な追越しをして、対向車線のダンプカーに衝突したもの、ほかの二件は、スピードの出し過ぎからハンドルをとられ、電柱、ガードレールに激突したものである。

このほか軽度の事故の報告も、一年間に二、三件はある。大学では事態を深刻に受けとめ、毎年、所轄の吉川警察署に講師を依頼し、交通指導教室を開いにり、校内掲示で啓

蒙したりしている。要は、己れの運転技量に合ったマナーを心がけることが要求されるのだが、若人は、スピード感がなによりも魅力らしい。

「狭い日本、そんなに急いでどこへ行く」という交通標語があつたが、まさにそのとおりである。日常よく経験することであるが、十分な車間距離を保っていると、必ず割り込まれる。一台でも追いぬいてとばかりに、虎視眈々ねらっている。なかには強引に割り込んでくるものもある。あげくのはては急ブレーキである。これでは接触や追突事故を起すこと必至である。現に無謀運転の車が追いぬいていったのもつかの間、事故を起した例を多く見ている。

人生に譬えるならば、絶えず駆足かけあしの生活をしていることになる。世は競争社会であると

いわれて久しいが、他た人に負けたくない、一人でも追い越せと、息急ききつた生活を余儀なくされている。

だれでもものんびり、マイペースの生活をしたいと願望している。しかし、世間はそんなにあまくない。受験、就職、昇任等々、すべてがサバイバルゲームである。競争に勝つところこそが人生であるといった風潮さえある。

これでは人生を謳歌するどころか、くたびれるために生きていることになりかねない。

こうしたことから、中堅のサラリーマン層に中心に精神疾患を訴える人が急増しているという。身体上は何ら支障がないのに、頭痛や動悸、虚脱感などさまざまな症状を訴えている。これでは責任ある仕事ができない。できないために、さらに状態が悪くなる。まさに悪循環である。

競争の社会、それをあおるかのような情報過多の社会、まことに厳しい時代となった。

よほど上手に気分転換をしないことには、ストレスが増すばかりである。それを乗り切るためには、心身をいかに鍛えるかが肝要である。

換言すれば、節目のある生活をいかにするかということになる。それも、単なる通過点とするのではなく、中味のあるものとする。つぎのステップに向けて、反省すべき点は大いに反省する。つぎなる飛躍への足がかりと捕えることである。

車社会でいえば、信号がまさに節目である。どんなに急いでいても、赤信号になれば、ルールに則って停止する。そして、青信号になれば、目的地に向かってスタートとなる。近時は、交通事情の悪化からか、やたらと信号が多いが、それでもドライバー、車とも信号停

止で小休止できる。

人生でも同様だ。出来るだけ多くの節目を設定し、その折々に心身を休める。リフレッシュして、つぎなる目標に立ち向う。節目節目を気分転換、一新の機会とする。そうすることによって、人生目標の修正、微調整が出来るからである。

彼岸会は、いうまでもなく六波羅蜜を實踐する、仏道修行の期間である。彼の岸（人生目標）を目指して、一步一步（節目）を、着実に歩む期間である。決して駆足ではなく、地道に歩むことが肝心であり、そうすることによって目標が達成されることになる。

私自身も、節目の中で最重要な春の彼岸を迎えるに当り、この一年を深く反省し、心身ともに充電、リフレッシュし、つぎなる目標に立ち向いたいと考えている。

(話) (童) (教) (仏)

ひがんえ

— お彼岸行きの電車 —

布<sup>ぬの</sup>村<sup>むら</sup>哲<sup>てつ</sup>哉<sup>や</sup>

竜一は、いつものようにヘッドホーンステレオをカバンに入ると家を出た。大学生になった竜一は、どんな格好をしても親から文句は云われない。ましてアルバイトをして買ったオーディオ器械は、完全に自分のものだ。

なぜならば、これらの道具こそ、自分の世界を作る必需品なのだから。

中学、高校と大学受験までは、両親や

先生から毎日のように「勉強々々」と云われ通しだった。それでも何とか我慢をして勉強に打ち込み、やっと大学へ入った。

さあ、これからは自由に自分の云いたいことを云い、したいことをして過せると思っている。

事実、親からも

「もう大学生なんだから、自分のするこ

とには自分で責任を持って行動しなさいよ」

と云われているし 自分でもそのつもりでいる。

この前 お寺へ行ったとき 和尚さんからお布施の話を聞いて お金がなくても ほどこしはできるんだと云われた。

だから 四、五日前にも学校へ行く途中のバスの中でお年寄りに席をめずった。でも「ありがとう」の言葉もない。せっかく ほどこしをしてあげたのに何だか損をしたみたいだった。それから なるべくヘッドホーンをつけて目をつぶり自分だけの世界を作るようにしている。だれからも邪魔されたくないのだ。

このように みんなが耳をふさいで自分のことだけを考えているから 他人の

ことにも無関心 自分のやっていることすらわからない。

ドドドドドー ガラガラガラー

巨人の国からきたプロレスラーがリングの上でゴリラと椅子を投げ合っているみたい。

バリバリバリー ウワーウワーウワー

オートバイにまたがったライオンがこれ以上大きく開けられないといった口でほえているようだ。

あまりにもうるさいので ヘッドホーンをつけて歩道を歩いていると

「このベルの音が聞こえないのか」と自転車の人にどなられる。

その上 歩く道路はゴミの山。空ビン 空カン 食べ残し。プラスチックを食いやぶり中味を引き出して喰い合う犬や

猫は まるで人間の臍物を食い千切る狼のようだ。

植木の中はゴミ捨て場。無残な猫の死体も横たわっている。自動車にはねられたのであろうか 牙をむいてにらんでいる。

これでは 戦乱 飢饉 疫病のつづいた昔の都大路と変らないではないか。

目をふさぎたいが ふさいだら最後こつちが自動車にペシャンコにされる。

こうなったら一刻も早く電車に乗ってヘッドホーンをつけてしまえばいい。いやな音を聞くことも いやなものを見ることもない。

竜一は 幸い座ることができた。

「さあ これから一人だけの世界になれるぞ」

ゆったりと座席に身をせずめ ヘッドホーンをつけると目をつぶった。

慣れた手つきでスイッチを入れる。

やがて湧き出るような振動と共に 音の波が耳から脳髓へ流れ込むと 竜一の気持がそれを待ち受けていたかの如くに合流して 身体中に浸透して行く。

電車は ひたすらに車輪をきしませ 乗客もそのリズムに身をまかせている。

ドアが開閉するたびに幾つかの足音がして 周囲で立ったり座ったりする気配はする。

が決して目を明けようとしないう竜一だ。せつかくの気分をこわしたくないし 余計なものを見たくない。見れば自分だけの世界が消滅してしまうから 無理をしてでも目をつぶる。

まわりに誰もいなくなつたようだ。

ゴッゴッゴッと連続音をたてて 電車はトンネルへ入った。

コロコロコロ カラカラカラ

妙な音がする。床でしているようだ。

それは あっちへころがり こっちへころがっている一個の空カンらしい。その虚しくさびしげな響きは まるで妖怪の笑い声だ。

暗い車内のあちこちで ガラス玉のようにキラリッと光るものがある。時々それらは竜一の方をそっとうかがうように まばたく。

しばらくすると ひとつひとつのガラス玉が竜一に近ずき やがて取りかこまれた。それはするどい猫の目だった。

ゴロゴロとのどを鳴している。

その中で ひととき大きな目玉が 白い牙をむき出して竜一の喉へとびかつてきた。

「ギャーオーッ。」

「だれかー たすけテー。」

竜一は 声にならない叫びをあげて目をあける。

電車は 長いトンネルをぬけて明るい光の中へ出た。

「ウウウウ ウフウフウフウフ。」

マシユマロのようなやわらかいその声は どこかで聞いたことのあるような遠い昔の竜一の声に似ている。

外は一面の黄色だ。春の日をいっぱいにあびた菜の花畠が 車窓を流れてゆく。

車内は 眠くなるようにのどかで 空気が黄金に染まっている。

まぶしいその光の中に座っているのは  
目の前の席にいる親子ずれと竜一だけ。  
ガランとしてだれもいない。

「ウウウウ　ウフウフウフウフ。」

父親と母親のあいだに　ちょこんと座  
っている子が声をたてて笑った。そのた  
びに父親の指か子供の首すじをくすぐる。

「ウフウフウフウフ。」

声にあわせて母親がほほずりをする。

竜一も一緒に溶けこんでしまふ　あた

たかい世界だ。

「あぶないっ。」

竜一がおもわず声を出しそうになった  
のは　子供がシートから落ちそうになっ  
たからだ。

一瞬のことながら　それよりも早く父  
親と母親の手が伸びている。そのなんと

素早い親の動作だ。目には見えないがし  
っかりと慈しみの糸で結ばれているから  
だろう。

竜一は自分を忘れて見つめている。

「ウフウフウフウフ。」

電車は　相変らず子供の笑い声を乗せ  
て走りつづける。

竜一は　もうふたたび目みつぶろうと  
はしなかった。耳をふさごうとしなかつ  
た。大きく目を開いて車内を見渡す。

いつの間にか　さっきの親子の姿はな  
い。気がつかない内に下車したのだろう  
か。そのかわり　車両のすみの席からこ  
ちらへ向って一生懸命におじぎをしてい  
るものがある。

よく見ると空カンと猫だちだ。

「なんだ 君たちも乗っていたのか」

竜一が言葉をかけると 空カンや猫から

「よろしくお願いします。」

という照れ臭そうな答えが返ってきた。

戸が開いて ニコニコしながら入ってきた車掌が帽子をとり 大きな声でさけんだ。

「毎度 ご乗車ありがとうございます。」

この電車は六輛編成でお彼岸まで行きます。」

竜一がどきまぎしながらたずねた。

「ぼくお彼岸までの切符を持っていないんですか。」

車掌は首を横にふりながら云った。

「この電車は 切符もお金もいりません。」

「じゃあ 何が必要なんですか」

「この車輛は『喜んで与えよう車』です  
から他人のためになることを喜んです  
ればいいのです。それでいいのです。そ  
うすれば自然にうれしいお彼岸に着きます。  
あとの車輛は 『喜んできまりを守ろ  
う車』と『喜んでがまんしよう車』と  
『喜んで努力しよう車』『喜んで考えよ  
う車』 そして『心の喜びを得よう車』  
です。どの車輛に乗り換えてもかまいま  
せんからどうぞ喜んでおつとめください。  
車掌は 竜一に挨拶すると 帽子をか  
ぶり直して出て行った。

学校の帰りの電車の中で 何気なく席  
をゆずっている竜一を見た人がいたかも  
しれない。  
(おわり)

東西宗教の交差点〔2〕

墓相さまさま

三月は春の彼岸月、この由来については誰方もご存知と思うが、私たち檀信徒にとって欠かせないのは、お彼岸の墓参である。東京辺りでは、「何を考えていますか」という花言葉の彼岸桜も、そろそろ蕾が綻びかけて、吹く風は少々肌寒くても、もう気持はすっかり春である。

福嶋瑞江

ところで、私たちが親しみをこめてお参りする一家の墓の形は、普通は台石の上に石塔の立てられたものが一番多いようだ。もちろん、古くは武家の墓のように、地水火風空の五大を型どった五輪塔や、土を堆く積んだ塚の形そのままの、俗に土饅頭と呼ばれる皇族や諸大名の奥つ城、また僧侶の墓石に多い卵

塔も見られる。

さらに、世に高僧として仰がれる方々は、



——総本山知恩院・法然上人御廟——

特別に社殿を構えた御廟が建立される。知恩院の奥深く、勢至堂の東の崕上に仰がれる法

然上人の御廟は、その代表的なものである。ここに、上人のご遺骸が奉安されているのだ。宝形造り、本瓦葺きの荘厳な佇は、私たちに口誦念仏開祖のご遺徳を末長く偲ばせて下さっている。

こうした墓の形や建て方も、近年では一般庶民の間でも多種多様自由に装飾的にさえなってきた。これも西欧化の一端であろうか。例えば、わが国オペラ界の草分けで、世界的なブリマドンナであった三浦環女史の場合は、その当り役にふさわしく蝶々の形をしている。

また、高野山の奥の院には、テレビドラマでお馴染の武田信玄をはじめとして、数々の有名な供養塔が建てられているが、最近では企業のPRもかねたロケットや、

ペアリングを型どった従業員の慰霊塔も見受けられる。これも世相の変遷の証だろうか。

このように死者を葬り、その遺徳を顕彰するのは、古代エジプトのピラミッドをはじめとして、インドでは、すばらしい仏舍利塔が各地で訪れる人びとを圧倒している。ピラミッドは四角錐形の塔のことで、これを金字塔と称するのは、まことに言い得て妙というほかはない。

余談は抜きにして、そもそも釈尊のご遺骨を奉安し莊嚴する仏舍利塔の塔とは、梵語「サンスクリットのストゥーパ (stupa)」を語源としている。「高く頭われる」の意で、方墳・円塚・靈廟などと訳されるが、この言葉が一番身近に使われているのは、私たちが供養として墓の後ろに立てる卒塔婆であらう。

それなら墓の方ばほうばということか、この漢字の起源は墓はかうという字の語源「莫」と「土」

の合わさったもので、死者を葬り、土で蔽ったところという意味である。

面白いことに、墓という英語の tomb、フランス語の tombe, tombeau も、語源はギリシ語の tombos からラテン語の tomba と変化してできたものだ。とくにフランス語の tombe は墓穴を指し、tombeau は墓石、墓碑を示すが、元来の語源的な意味では、小さな丘、つまり「塚」のことである。

さて、日本でも墓碑の形や相がさまざまなように、ヨーロッパにもその形体には、いろいろと変わったものが多い。もともと大理石のような良い石材に恵まれて、石像彫刻の盛んなところだから、それらは墓と言っても立派な芸術作品になっているものすらある。

キリスト教下にあるヨーロッパ人は、死後の復活を信じている。つまり、人間は死後、靈魂は肉体から離れ、大方は天国へと昇天す

るだろう。しかし肉体は、世の終わりに再び復活し、またその靈魂と結ばれるとされている。そのために土葬である。したがって墓石も長方形をしているのが一般だ。

また、日本に比べて墓参りをするものが少ないと思われがちだが、教会の裏庭にある墓地などでは、毎週日曜日にミサにあずかった帰りに、それぞれの家族が訪れるから、どこかの家の墓も競ってきれいな花で飾られている。

墓地と言えば、寓話作家のラフォンテーヌや詩人のミュッセ、美しいピアノ曲を数多く残したショパンなどの眠るバリのペールラシエーズ墓地や、またベートーヴェン、シューベルトといった大作曲家の墓で有名なウィーンの中央墓地などは、公園墓地の名に恥じない。まさにモニュメンタルな場所で、日本からの観光客で賑わうところだ。

こうした墓地で、私の印象に一番残っているのは、フランスの詩人ポール・ヴァレリーの眠る、通称「海辺の墓地」である。そこは南フランスの地中海沿いのセートゥという小さな町にある。詩人はこの小さいが活気のある漁港に生まれ、死後もここを安住の地に選んだのだ。そして数々の名作のなかで、とくに珠玉的一篇として名高い『浜辺の墓地』と題された長詩の中で次のように謳っている。

「あまたの大理石は あまたの亡霊の上に  
わななき…… そのほとり 忠実な  
海は 眠る わが墓々を守って！」（白井健三郎訳）

眼下に地中海を見下す小高い丘の墓地に立つて、真夏の陽光のもとに白く鋭く光る海、詩人は、これで見事な着想を得て、時間と永遠とを文学に凝集させたのだ。詩人の墓は、何のてらいもないごく普通の墓で、墓石の裾

に細い彫線で Paul Valéry と刻まれているのがゆかしかった。

しかし、所変われば品変わるの譬のとおり、イタリーに行くところの墓相は一変する。かつて私が、モンブラン廻りをしたときのことだ。スイス、フランスの国境に近いアオスタという町をバスで通過したところ、そこでちょうど家の形をした墓を見たことがある。これはイタリー独特のものだそうで、大きいものなら二疊敷はあろうか、丈もかなり高く三角に尖った屋根がのっていた。いかにも家族思いのイタリー人らしく、死後も家の形そのものが墓所になるのだらう。

ところで、ヨーロッパの貴人や高僧の墓には、死んだ姿をそのまま彫刻して石棺の上に置くものが多い。おそらく棺に納めた姿をうつしたものに違いない。これをフランス語で、ジザン (gisant) と呼んでいる。横たわった

という意味から「墓石の上の」横臥像と訳されているが、これらの見事な大理石像は、実に微細に、かつリアルに彫り起こされていて「一見して驚嘆おくあたわざる」とでも言うほかはないものだ。

たまたま、この彫像に関して岩波書店発行の雑誌『図書』の本年一月号に「骨と墓と生への意志」と題して、東京大学の養老孟司教授が、専門の解剖学の見地から非常に興味深い一文を寄せられている。

もちろんこうした彫像を棺の上に飾るのは、前にも述べたように、復活を信じるキリスト教の教義によるものだ。しかし、フランスのサヴォワ地方にあるオートコンプの大修道院で出会ったジザンは、私にまた別れの感慨を味わせた。

それはフランスと言ってもアルプス山脈の裾に、細長く広がるブルジュ湖畔に、ひっそ

りと、しかも堂々と建てられたベネディクト会の古い修道院の中である。かつてこの地方の領主で、フランス王家の一族でもあったサヴォワ公一門の人びとが、美しい横臥像と化



——スペイン王フェルナンドと  
女王イザベルの墓所——

して聖堂に眠っていた。

なかでも、ひととき私の目を引きつけたのは、まだ幼少の身でこの世を去った王子のものであった。四人の天使に高々と支えられた、こよなく美しいその寝姿、王子も天使も汚点一つない純白の大理石で、とくに両手を合わせて祈る清純な顔かたち、これほど美しくも哀れを誘う墓石は、他に類がないであらう。しかし、それはこの王子の復活を願うよりも夭折の王子を傷む気持が余りに強くて、この姿そのままに、なおも現世に引きとめておきないと願う人びとの、悲願の象徴のようにも見えたのである。

これにひきかえ、スペインのグラナダの大聖堂に横たえられたアラゴン王フェルナンドとカステイラの女王イザベルのジザンは、さすがにスペイン統一の偉業をなしとげた英雄だけあって、壮観というより豪快な趣きがあ

る。

この二人は、それまで国土のほとんどをアラブ人に占領されていたスペインを、回教から開放し、一四六九年の結婚によってカトリックの王国を打ち立て、今日のスペイン王国の基礎を築いたのだ。また、この王と女王の遺骸を納めた棺は、このジザンの真下に、つまり地下の聖所に、その象徴である王冠とともに安置されているという。

ところで、同じスペインでありながら、このような彫刻など一切飾らない、打って変わった墓もある。それは墓というより遺体安置所とも呼びたいような、棚に行季でも置くように棺を棚に収めたものだ。私が見たのは、エスコリアル宮殿のなかで、これも後のスペイン王家の墓所であった。やや円形をなした壁に四列、上下四段に金で装飾された棺が納められていたが、そのうちの一つは婦人用で

まだ中は空だと説明されても、何だか実感が湧かなかった。

思うに、これはローマ郊外の地下に広がるカタコンブの初期キリスト教殉教者の墓所の形を豪華絢爛にしたとでも評したらよいのだろうか。しかし無名の、強い信仰に殉じた人びとこそ、カタコンブのような本当の墓らしい墓に眠るのかも知れない。

人間の終着の形として、いろいろな墓相を見てきたものの、今ここでしみじみと心にひびくのは、法然さまのお言葉である。

偉大な師僧の往生の近いことを感じた弟子信空は、法然上人に、上人の遺跡となるべき場所を尋ねると、上人は次のように答えられた。

「念仏を修するところは、すべてわが遺跡である。」

(つづく)

(報)

## 道 瀬 幸 雄 氏 逝 去

(訃)

——『浄土』誌の編集長として活躍——

戦前の『浄土』誌編集長として読者から親しまれた道瀬幸雄氏がこの二月九日(火)に逝去された。八十三歳の天寿を全うされた。

道瀬氏は僧侶ではなかった。早稲田実業では野球選手として甲子園に出場している。そのあと明治大学へ進み、野球を離れ、後に首相となった三木武夫氏らと弁論部で活躍する。三木氏が渡米したころ、彼は左翼政治運動へ没頭してゆく。無産者新聞の編集にたずさわっていたが、昭和四年の四月第三次共産党大檢舉

(四・一六事件)で逮捕される。転向後は真野正順、中村弁康両師の教化を受け、折から創刊した『浄土』誌の編集にたずさわる。ことに増上寺法主大島徹水台下には愛されて、長男にもその一字をもらい「徹」君と命名したのである(現在、一級建築士)。

戦後は横浜で英語塾をひらき、若い男女たちから慕われ幸福な半生を送った。次男幸太君は小学館、長女一美さんは週刊誌『平凡』勤務と、いずれもジャーナリストで父業を継いでいる。

木

下

隆

一

随

筆

集

12

## 海と山の狭間で

—唱歌と童謡(2)—

木きの  
下した  
隆りゅう  
一いち

日本の唱歌の成立については、前号で軽く触れた。初めは外国の旋律に独自の歌詞をつけた物から入ったが、それも完全な訳詞ではなかった。外国語に堪能な人も少なかったし、「蝶々」にしたところで、母国スペインを離れると、ドイツではドイツで、アメリカではアメリカで、それぞれ勝手な歌詞をつけて歌っていたのだから、原曲に即した訳詞と  
いうのは不可能に近かったに違いない。著作権法という制度が確立していなかった時代のことだから許されたのであろうが、むしろ音符も何も知らなかった国文学者や歌人が、西洋の楽曲を足踏みオルガンや手風琴のような楽器を何度も何度も繰り返し弾いてもらっ

て、耳から覚えて歌詞をつけていったのであるから、全く原曲とは異なった歌が出来上ったとしても、その努力は賞讃に価する。戦後、同じような現象が音楽界に起こっている。敵性音楽だったジャズを筆頭に、外国曲が占領軍と共にどっと流れ込んできたが、未知の物を貪婪に吸収した明治初期と、抑圧されていたものから解放された昭和二十年の時点では、環境も状態も全く異なっている。にも拘わらず、受け入れる側はといえば、奈良時代から異文化を迎え入れ、それを自家薬籠中の物にしてきた新し物好きの精神はいささかの衰えも見せず、いまだに新しいリズムの吸収に汲々としているのである。あれからもう半世紀近く経っているのに、なぜ日本独特のリズムや旋律を持った唱歌や童謡が生まれないのか、私は不思議でならない。

それはさておき、明治時代唱歌に採用された外国曲を拾ってみると、「蝶々」の他に、

「見渡せば」(『結んで開いて』の方がよく知られている)ージャン・ジャック・ルソー作曲、柴田清熙・稲垣千穎作詞。「蛍の光」(原名 Auld Lang Syne『久しき昔』)ースコットランド民謡、作詞者未詳。「霞か雲か」(原名 Frithings Ankunft『春の訪れ』)ードイツ民謡、加部巖夫作詞。「仰げば尊し」ースコットランド民謡、作詞者未詳。「才女」(原名 Annie Laurie)ースコット作曲、作詞者未詳。「船子」(原名 Row your Boat『船を漕げよ』)ーライト作曲、里見義作詞。「庭の千草」(原名 The Last Rose of Summer『夏の最後のバラ』)ーアイルランド民謡、里見義作詞。「故郷の空」(原名 Comin' Through Rye)ースコットランド民謡、大和田建樹作詞。「あはれの少女」(原名 Old Folks at Home『故郷の人々』)ーフォスター作

曲、大紀田建樹作詞。「旅泊」(勝承夫作詞『灯台守』の方が知られている)ーイギリス民謡、大和建樹作詞。「春風」(原名 *Massa's in cold cold Ground* 『主人は冷たき土の下に』)ーフォスター作曲、加藤義清作詞。「埴生の宿」(原名 *Home, Sweet Home* 『楽しい我が家』)ービショップ作曲、里見義作詞。「秋のあはれ」(讃美歌(日本では二九一番))『主に任せよ汝が身を』ーマラン作曲、鳥居忱作詞。「旅愁」(原名 *Dreaming of Home and Mother*)ーオードウエイ作曲、犬童球溪作詞。「故郷の廃家」(原名 *My dear old sunny Home*)ーヘイス作曲、犬童球溪作詞。「野なかの薔薇」(原詩ゲーテ。シューベルト作曲の曲も著名)ーヴェルナー作曲、近藤朔風訳詞。「美し夢」(原名 *Wiegand's* 『子守唄』内藤濯訳詞の『シューベルトの子守唄』の方が愛唱された)ーシューベルト作曲、近藤朔風訳詞。「ローレライ」(原詩 *Lorelei* はハイネの作)ージルヘル作曲、近藤朔風訳詞。「夜」(歌劇『魔弾の射手』より)ーウエーバー作曲、与謝野晶子作詞。「七里ヶ浜哀歌」ーガートン作曲、三角錫子作詞。「星の界」(讃美歌(日本では三二二番))『いつくしみ深き友なるイエスへ』)ーコンヴァース作曲、杉谷代水作詞。「故郷を離るる歌」ードイツ民謡、吉丸一昌作詞。……

などがあるが、いまなお歌い継がれている歌も少なくない。一番新しい「故郷を離るる歌」でさえ、七十五年以上の命脈を保っているのだから大したものである。日本人好みの哀調を帯びた旋律(「故郷の空」のようにリズムミッドな物をメロディックに変えてしまった物もある)と、花鳥風月をモチーフにした文語体の美文調の詞がなぜか心地よく、私事を言わせてもらえば、半ば意味が分からないにも拘わらず、口遊んでいるうちに分かったような気になる

って歌っていたような気がする。これは何も外国曲に限ったことではなく、その後次々と作り出された純国産の唱歌にも言えることである。例えば、佐々木信綱作詞、小山作之助作曲の「夏は来ぬ」、いまでもよく歌われている歌だが、

一 卯の花の 匂ふ垣根に 時鳥ときどり

早も来啼きて 忍音しのびねもらす 夏は来ぬ

二 さみだれの注ぐ山田に 賤しづの女めが

裳裾ぬらして 玉苗植うる 夏は来ぬ

三 橘の薰る軒端の窓近く

螢飛び交ひ おこたり諫むる 夏は来ぬ

四 棟あふもちる川辺の宿の門遠く

水鶏くひな声して 夕月涼しき 夏は来ぬ

五 五月きつき闇 螢飛び交ひ 水鶏啼き

卯の花咲きて 早苗植ゑわたす 夏は来ぬ

の歌詞を見ても、習った頃は分らないことだらけだった。卯の花も時鳥も、棟も水鶏も、なぜ螢が怠りを諫めるのか……。間もなく、棟が梅檀の古名であることや、螢が「螢の光

窓の雪……」の蜚であることは理解できたが、卯の花と時鳥は概念としては分かっているものの、いまだに私は実物を知らない。従って卯の花や時鳥の俳句を作れと言われれば作れないことはないが、所詮は空想の産物に過ぎず、とても他人様の鑑賞に堪え得るような句がでるはずはないのである。水鶏に至っては、姿も啼き声も想像の埒外である。この歌を教わったのは何年生の時だったか覚えていないが、二番の賤の女は早乙女に改められていたように思う。いつ改められたのか知らないが、すでに差別用語という意識が胚胎していたのであろうか。

明治五年に学制が頒布されてから、小・中学校の教科書は文部省出版の物と、民間で出版されて文部省が適当と認めた物の中から、地方長官が任意に選べるようになっていたが、唱歌教育の教材は文部省音楽取調掛が編集した官版の「小学唱歌集」があるだけで、十九年小学校令が公布されて「第十三条 小学校ノ教科書ハ文部大臣ノ検定シタルモノニ限ル」とされた後も、二十一年「明治唱歌集」（大和田建樹・奥好義選）が出版されるまでは唯一の教材であった。

明治十二年、文部省音楽取調掛が伊沢修二の献言が設置され、伊沢は東京師範学校校長在職のまま、その御用掛を兼任し、アメリカ留学中師事したボストンの音楽家メーソンを招聘して、音楽教師の養成と唱歌教材集の編集に当たらせた。こうしてできたのが「小学唱歌集初編」（明・14）「小学唱歌集第二編」（明・16）「小学唱歌集第三編」（明・17）「幼稚園唱歌集」（明・20）の四冊であった。

音楽取調掛には、宮内省雅学寮の上真行、奥好義等が助教として入っていたので、これらの集中には雅楽律旋法によって作曲された物（例えば第三編の「四季の月」（作詞者未詳））も何曲か収められている。伊沢の音楽理念は「東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること」であったから、これは当然の帰結、いや出発であったと言える。当時、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階を、ヒ・フ・ミ・ヨ・イ・ム・ナ・ヒで表していたが、雅学律には第四音のヨ（フ）と第七音のナ（シ）が無く、後世これを「ナヨ抜き音階」と言っている。蔑的に捉えているが、確かに和音、和声の普及を阻んだのは事実である。私の子供の頃は、合唱と言っても総べて斉唱で、三部合唱や四部合唱、輪唱などと言ったしゃれた唱法は教えてもらえなかった。音楽教師が未熟だったことにもよるが、「ヨナ抜き音階」が影響していたことは否めない。

「言文一致論」、碎いて言えば話言葉で文章を書く、つまり現在の口語文であるが、明治十七年に国語学者物集高見が提唱し、小説では山田美妙、二葉亭四迷、尾崎紅葉等が実践して先鞭をつけ、ホトトギス派の学生文や自然主義派の小説に至って四十年前後には定着した。文語体で書く文章は上品で、口語体の文章は下品という先入観が、言文一致を遅らせたのである。唱歌の世界でも同じ考え方の人々が現れた。東京高等師範学校の教官だった田村虎蔵がその提唱者で、彼は文学者の大和田建樹、佐々木信綱、巖谷小波、石原和三郎、学習院教官の音楽家納所升次郎等と結んで言文一致唱歌を創作し、子供の言葉で子供の感情に合った唱歌をという主張を貫いた。

## ○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』三月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八―二一八七



立ち止まるを善導

〈45〉

寺内大吉

挿絵・松濤 遠文

## 親縁の駅路

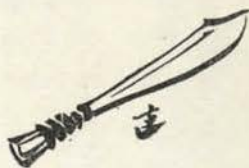
+

終南山の悟真寺で王徐明は日がな念仏三昧に明け暮れた。じきにきびしい寒気が襲ってきたが、いっこうにこたえなかった。

この寒気が病身の善導和上へふりそそぐさ

まを思ひえがいた。それをいささかでも防げるのであれば、おのれ一身の凍ごえなぞは問題にならなかった。

自分は若くて健康なのだ、と氷雪をふくんだ裂風へ叫びかえしてやりたかった。この胸板や背中を防壁にして、善導和上の病んだ身をお守りしているのだ、と自覚することで、熱い血気が体内を回流した。念仏をとなえる



声にハリがこめられた。

ただ夜が恐ろしかった。独り暮しの悟真寺が、ではない。恐ろしいのは「夢魔」であつた。

善導から授けられた中夜、後夜の往生礼讃を朗々と唱誦し、阿弥陀仏にくり返し礼拝をやつたあと、結跏趺坐したまま安らかな念仏とともに眠りへはいる。

そこまでは文句のつけどころがない。眠つたあとである。夢の世界へはいりこんでゆく。

以前もそうだったが、王徐明の夢には淫らな場面が多かった。いや、以前にもましてその淫らさが悪どくなっている。濃密で、現実感がいつそう鮮明である。

だから目ざめは、いつも不快な昂奮状態であつた。せっかく阿弥陀仏の世界から安らかな眠りへ没入しながら、そこには欲念の地獄が渦巻いていたのである。

この点について、一日神和原に善導をたず

ねた。

「日中、日没、中夜とあれほど阿弥陀さまだけを押がんできましたのに、かんじんの夢寝にはさっぱり現れてくれませんか」

「いつぞやもそんなことを言っていましたね」

「お山へゆけば変わるものと期待していましたが、夢はいよいよ悪くなつてまいります」

善導は、しかし深く取り上げる様子もない。

「吏生は、よほど人間が好きなんでしょう。仏さまよりは」

「仏よりも人間が好き……」

「性根の底で人間を好いているからこそ夢に現れてくるのです。それはそれで良いではありませんか」

「仏よりも人間が好き……」

王徐明はこの言葉を反芻しながら終南山へ戻つた。

人間の内容が問題だ。あの則天武后のよう

な女体が乱舞する人間群像はたしかに唾棄すべきであろう。だが、仏さまに近い高徳な人間が登場してきたら、その夢はどうなるのであろうか。

そうだ。善導和上だ。あの人と夢のなかでお遇いできるように想念の集中をはかればよいのではないか。

王徐明はその晩、いつもどおり就寝前の修法を終えた。いつもだと正面に安置した阿弥陀仏のお木像へ熱い視線をあてるのだが、今夜は静かに瞑目した。善導和上の柔和な顔、優さしい声に想念を集中した。

日中の残像が次々に現れてくる。その静かな口調で語ってくれた声音が、戸外で吹き荒れる風をおさえつけるように響きわたる。そのまま深い眠りへ引きこまれた。

夢こそ見なかったが、朝の目ざめは爽かであった。もちろん淫らな夢魔なぞ片鱗もなかった。

二晩、三晩、こうした眠りをかさねている

うちに王徐明は遂に夢のなかで善導和上とめぐり遇った。それもかつて出合った折の再現ではなかった。夢の中で和上は明らかに生きていた。語りかけこそしなかったが、柔和な表情は無言の説法を与えてくれる。お互いの心がびったりと密着する思いであった。

善導より五百年も隔てて、国も遠く離れた日本に現れた法然は、善導の教えを信ずる余り、遂にこの「夢感対面」を実現させている。

たしかに浄土教は阿弥陀仏を信仰するのが教旨である。しかし、その阿弥陀仏とはどんな姿をしているのか。何処にいますのであるか。金属や木質で造りあげられた仏像であるのか。

その仏像に魂がこもっているとき、憑依信仰の対象ともなり得る。だが、その魂をこめる作業は甚だ難事である、と法然は「選択本願念仏集」で言いきる。

——若し夫れ造像起塔を以て本願を為さば、貧窮困乏の類は、定めて往生の望（み）を絶たん。然るは富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。

そうした有難いお仏像とめぐり遇うこと自体が、貧しく愚鈍下智な庶民には不可能だとする。

——然れば則ち弥陀如来、法藏比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を摂せんがために造像起塔等の諸行を以て往生の本願とせず、唯だ称名念仏の一行を以て、その本願と為せり。

その法然はある夜こんな夢を見ている。  
彼は山を登ってくる。中腹までくると、突如西の中空に紫色の雲がかかり、雲の中から孔雀や鸚鵡が翔き舞うてきて、眼下の河原で遊びたわむれる。さながら極楽浄土の風景そ

のままで。そこへ一人の僧が立ち現れる。墨染めの法衣をまといっているが、その下半身は金色に輝いている。

誰方ですか、と法然は問いかける。善導である、と答える。「なぜ此処へ来られたのですか」との問いに「お前の念仏が尊いのでやってきた」と答える。「それほど専らに念仏を唱えることは尊いのですか。往生は疑いなしですか」と念押しをするが、善導は答えず姿をかき消し、法然は夢からさめたという。

「西方指南抄」は法然の善導への帰依渴仰ぶりをこの「法然聖人夢想記」で紹介している。法然が造像起塔よりも、「念仏の声するところ……」そのすべてがわが遺跡だと強調したのも、念仏者同志による心の結束を重んじたからである。

法然の弟子親鸞の師への愚依ぶりも並みないものでなかった。

——親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に

たすけまいらすべしと、よき人のおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。

「歎異抄」で表白するこの「よき人」が師の法然であることは言うまでもない。さらに親鸞は、

——たとひ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。そのゆえは自余の行をばげみて仏になるべかりける男が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ。いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことおわしませば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしませば、善導の御釈、虚言し給うべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせ、そらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞が申すむね、またもてむなしかるべ

からず候か。

釈尊——善導——法然、そして自分へと連結してくる念仏の系譜を親鸞は明快に言いあてるのである。これは客観的な師資相承の系譜ではなく、念仏信心の本質そのものだとさえ断言する。念仏は人間だけに許された願いだからである。

十一

王徐明は、師の善導和上を日ごと夜ごと思いえがくことで念仏生活に充実感をおぼえること、この事実を是非告げておかねばならなと思った。突厥の酷吏——泥鬼にである。彼の念仏信仰は自分をとおして培われたものだが、自分がいま気づいたことを彼が知る道理はなかったからである。

泥鬼はどこに潜伏しているのだろうか。

王徐明は神和原へ出かけていった。

あの女なら、きつと知っているであろう。

でも女は口を割らなかつた。いや、ほんとうに夫の所在を知らないのだろう。ただ一言だけ。

「西市あたりで販布でも………」

と洩らした。

販布とは、毛皮や綿製品をセリ値で商う露天商で、突厥や西域人が多くこの業にたずさわっていた。むしろ常識的な情報であつた。泥鬼が姿をくますとすれば、そこらの群れへ投ずるとは誰もが考えることである。

その晩、善導和上の傍らで一夜をすごした。王徐明が夢の話を告げたとき、善導は微笑んで、

「わたしも近ごろ、しばしば同じ夢を見ます」

と語つた。

「同じ夢とは？」

「白い駱駝が現れるんです」

「いつぞやもうかがいましたね。白い駱駝にまたがった聖者が、和上にねぎらいの言葉をかけるのではありませんか」

「いや、あのころは此方へ向つて来られたのですが、近ごろのは姿をお見せになつたあと、ふり向きもしないでぐんぐん遠ざかつておしまいになる」

「遠ざかるのですか」

「いよいよ西方の国へわたしをお導きになるのではありますまいか」

入寂が迫つたことを暗示するような夢告だつたと言える。

いま善導があのこととは、「観無量寿經」の注釈「觀經疏」を不眠不休で書き上げた當時をさしている。「散善義」の末尾で誌るすのである。

——後時に脱本しおわつて、また更に至心に七日を要期し、日別に阿弥陀經を誦するこ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

夢  
告



と十偏、阿弥陀仏を念すること三万偏。初夜後夜にかの仏国土の莊嚴等の相を觀想し、誠心に帰命すること、もっぱら上の法の如くにす。当夜に即ち三具の確輪の道のほとりに独り転ずるを見る。忽ちに一人の白き駱駝に乗るものあり。来たりすすんで勸めるを見る。

「師はまさに努力し、決定して往生すべし。退転をなすことなかれ。この界は穢惡にして苦多し。わずらわしく貧樂せざれ」と。答えていわく。「大いに賢者の好心の視誨をこうむる。それがし、畢命を期となし、あえて憊慢の心を生ぜず、云々」と。

さらに第二夜の夢は、真金色の体色をした阿弥陀仏とめぐり遇い、第三夜には淨土へ至る美しい道筋をしっかりと見定める。

——すでにこの相を得おわって、すなわち休止し、七日に至らず。上來所有の靈相は、本心は物の（人々）ためにして己身のために

せず。すでにこの相を蒙りて、あえて隠藏せず、謹んで以て義の後に申呈し、聞を末代に被らしむ。

善導が幾歳ごろ、この「觀經疏」を遍述し終えたかは不明であるが、インドから帰朝した大部の經典をもたらした玄奘三蔵のために唐の太宗が大慈恩寺を建立し、そこへ「宝車五十乗を飾り諸大惡を乗せ」て迎え入れたのが貞觀二十二年（六四八）の十二月である。有徳五十人僧に善導も加わっている。すでに「觀經疏」という偉業を果たし終えていたからであらう。善導が三十五、六歳のころと推量できらる。

それから三十余年、善導は入寂への道を指示する白い駱駝を夢で見たという。王徐明は終南山で自分が善導思慕の夢を見てゐるとき、師もまた往生相を明確にするとあれば、願生者としていよいよひとすじの道を歩み出した、と確信できるのであった。

一刻も早く突厥人泥鬼にこの精進法を伝授しなければならぬと思った。

翌朝、王徐明は西市場へ出かけていった。

いつに変わらぬ賑わいである。ことに販布肆（店）が立ち並ぶ一帯は、セリ売りの掛け声もかますびしく、活気横溢であった。

泥鬼はどこにいたのだろうか。突厥人の売り子たちの顔を一つ一つ見あらためながら王徐明はしかし、不吉な予感におそわれた。界隈の雑踏を歩く群衆のなかに二人三人と眼つきの鋭い男たちが混じっているのに気づいたからである。

城から送りこまれた刺客にちがいない。それも相手は武后を裏切った泥鬼であらう。

刺客たちも所在を突きとめかねる様子だ。

王徐明同様に、物珍らしげに売り子たちの顔を一人づつ覗きこんで歩いている。

刺客たちが発見するより先に自分が気づいて、泥鬼を逃亡させなければならぬ。

王徐明のこの願いは空しく潰えた。

そこは戸板にうず高く毛皮を積み上げた店で、セリ売りするのは若い衆で、毛皮のかけで黙々と売り上げ金を数えている男こそ、泥鬼であった。

逃げろ、と王徐明が声をかける前に早くも刺客たちが左右から突厥人の腕をとらえていた。

泥鬼は抵抗しなかった。腕をとられたまま市場を出外ずれ、人混みの途切れた小川の方へ去ってゆく。王徐明も追尾していった。

「城へ帰るんだ」

刺客の呟くような声が伝わってくる。そこへ全神経を集中していただけに、王徐明にははつきりと聞きとれた。

左右からしっかりおさえこまれて泥鬼は西市場を出ていった。追尾する王徐明は迷いを深くする。

ここで飛び出して突厥人を奪い返すべきであるか。

しかし、王徐明とても追われる身であっ

た。揉み合つて同時に逮捕され、城内へ引かれてゆけば泥鬼と運命を共にしなければならぬであろう。

相手は二人である。泥鬼と協力して彼らを駆逐する手もある。ただしその場合、殺害を覚悟しなければならない。許されることなのであるか。

迷っているうちに長安城の巨大な城壁が見えてきた。衛士の影が各所でちらついている。刺客を殺して突厥人を奪還することも不可能になった。

諦らめて、そのまま見送る決意をかためた王徐明だったが、両足はぐんぐん泥鬼たちに近ずいていった。その足は、しきりと王徐明の心へ語りかけてくる。

どんな目的で泥鬼と会おうとするのか。俗事ではない。人間がぎりぎり求める魂の問題ではないか。

「観無量寿経」でも明示している。

——あるいは衆生ありて、不善の業たる五逆十悪をつくりて、もろもろの不善を具す。かくの如き愚人は悪業を以ての故にまさに惡道に墮して多劫を経歴し、苦を受くること窮まりなかるべし。かくの如き愚人は命終の時に臨み善知識の種々に安慰し、ために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇えり。この人は苦にせめられて念仏すること能はず。善友告げていわく。「汝もし念ずること能わすば、まさに無量寿仏を称すべし」と。かくの如く至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称せしむ。

酷吏泥鬼は五逆十悪の所業を重さねてきた。それが晩年に至り善導和上とめぐり遇えた。妙法を聴くことができた。しかし、なお宿世の因縁から晴れがましい生きざまは求め得ない。陋巷に潜伏していなければならぬ。

經句に従えば「この人は苦にせめられて念

仏するいとまあらず」であろう。そこへ善友が現れて称名の有難さを教える。阿弥陀仏のお姿を見ることが出来ずともその御名をとなえるだけで必ず慈悲に浴し得るのである、と。

いま、その善友はお前、王徐明以外にあり得ないではないか。城内の獄へ封じこめられ、処刑を待つ短い明け暮れに必ず善導和尚のお姿を思いえがけよ。そして念仏をくり返しとなえよ、と教えることが出来るはずだ。

善友王徐明よ。それをやらずしてお前は念仏者と言えるのであるか。

「ちょっと待ちなさい」

泥鬼たちに追いついた王徐明は恐れながらも、明るく呼びかけていた。

十二

「あんたは誰だ」

捕吏の一人が訊いた。

「わたしを天后のもとへ連れてゆきなさい。

この人と一緒に」

「仲間というわけか」

現れた瞬間、王徐明に気づいた突厥人はなつかしげに微笑んだが、すぐに悲しい眼に変えた。

捕吏たちを無視して王徐明は言った。

「母も子も無事に暮しているよ。母親は尼になって和上に仕えている」

「知っている……」

呟いて、うなずいた。おそらく、ひそかに神和原へ現れては様子をうかがっていたにちがいない。

「天后さまがお前らにお会いになるかどうか」

捕吏は突然割りこんできた僧形の仲間にご惑しているようだ。そんな命令は聞いていないからである。

「玄武殿地下の石牢へぶちこんでおけばいい

のだ」

捕吏ならぬ王徐明自身が指図する。

「玄武殿の地下牢だ？　お前は誰だ。なぜそんなところを知っているのか」

「ついこの間までお城で暮っていたんだ。そこへぶちこんでから天后へお伺いを立てたら良からう。酷吏の泥鬼と吏生王徐明を捕らえてきましたとな」

「吏生王徐明か……」

この指図に捕吏たちは安堵の表情をつくった。おそらく彼らが受けた命令は泥鬼を街からさらってきて城内の馬場の一角で刺殺し、屍体を埋めておけ、というぐらいだったのであろう。

望みどおり王徐明は突厥人と狭くろしい石牢へ投げこまれた。

「何でこんなことをしたんだ」

泥鬼は理解できぬといった眼差しを向けてくる。

「あんたと話がしたかった」

「話をしてもこのまま殺されるぞ」

「殺されてもいいんだ。死ぬ前に是非とも聞いてもらいたい話だ」

そこで王徐明は諄々と阿弥陀仏信仰の真髄を説いて聞かせた。とりわけ「見仏」の問題を強調した。

莫然とした阿弥陀仏を思いえがいても駄目だ。最も近くて、親縁の念仏者を常住坐臥に「観念」してこそ我々の魂は救われる。

「その親縁の念仏者が善導和上であることは言うまでもあるまい」

「和上のお姿を朝な夕なに思いえがくのだな」

「そうだ。和上は阿弥陀さまの化身でいらっしやる。そのお姿を思いえがいて、阿弥陀さまの御名をとなえとおしてこそ、わしらは真実の生活が出来るというものだ」

「真実の生活といってもそれは幾日もないな」

「うむ……」

「明日か明後日、いや今夜にでもわしらは首をハネられるかもしれん」

「そうだ。あと幾刻も生きられぬであらう。

だがな五逆十惡のわしらだ。最後の瞬間に眞実の生きかたが出来たということだけで素晴しらいのではないかな」

「そうか、少しわかりかけてきたぞ」

「わかつてくれたか」

「ただし、わしは善導和上のお姿なんぞ思ひえがかんぞ。余りにももったいない」

「もったいない？」

「わしは、あんたをこうしてじっと見つめていよう。王吏生よ。おのれの一身を投げうって教えてきてくれたあんたこそ、わしにとつては阿弥陀さまの化身だぞ。あんたを見つめながらわしは南無阿弥陀仏をとなえ続けよう」

善導から王徐明、その王徐明から酷吏泥鬼へと、いまひとすじの念仏の綱はたわわみもなく張りとおされたのであった。

則天武后からの沙汰は、なかなか石牢へは届けられなかった。三日四日と放置されたままだった。無論、天后は彼らに会おうともしなかった。そんな過去を忘れてしまったのであらう。

少年憚良は、叔母の天后に呼び出された。則天武后は王徐明のことを告げた。

「とつくに死んでしまったと思っていたのに未だ生きていたんだよ」

「いま、どこにいますか」

「いいえ、もう終わったでしょう。わたしを裏切ったあの男に刺客を送りこんだのよ。ところがその刺客は、あの男と仲良くなって兩人そろって玄武殿の地下牢へ閉じこめられていたんですって」

「それが終わったとは？」

「石牢の中で刺客には命令を遂行させました。そして刺客は処刑したはずよ」

何たることぞ。憚良は天后の御前を退かるとその足で玄武殿へ走った。

地下の石牢へ駆けつけると、そこは血の海だった。王徐明と泥鬼とが突っ伏して、こと切れていた。お互いが刃を握っていた。刑吏から渡されたその刃で刺しちがえて果てたにちがいない。

しかし、二人とも安らかな死に顔だった。

あれからの数日間、彼らは阿弥陀仏への親縁の駅路をひたすらに歩み続けた。この見事な往生へたどりついたのであろう。

事情がよくのみこめない憚良は、翌日神和原へ善導を訪ねた。

「そうでしたか。処刑されてしまったのですか」

「刺しちがえを強制されたようです」

「とすると近ごろわたしがいきりに見る白い駱駝の夢、あれはあの二人をお浄土へ導いてくれる使者だったわけですね」

「白い駱駝の夢とは。それはどういうことですか」

「あとでゆっくり話してあげます。その前に

あの人たちの旅がつつがなく西方へ向いますように一緒にお念仏をとなえましよう」

善導は戸外へ立ち出でた。背後の小山へ登った。憚良も従った。

西方の空に向って朗々と念仏をくりかえした。憚良も唱和した。

そのあと善導は往生礼讃を誦しはじめた。

まだ太陽も高く、日中礼讃だった。

しかし、善導の声は途切れがちになった。

悲しみのためではなさそうだ。体力が限界へ達していたのだ。でもそれを補う声が新たに

おこっていた。女性の声だ。

僧形の泥鬼の妻。いまは往生礼讃の全唱句

を暗記してしまっている。淀みなく、若くみ

ずみずしい声で、うたい続けてゆく。

小山の麓で幼児が無心に穴をほじくりかえしていた。

(つづく)

## ◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

### 「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年 二月二十五日 印刷

昭和六十三年 三月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒102 振替東京八一八二一八七番

好評

# 浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁  
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、  
讚真偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺  
悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降  
魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B6判四二四頁  
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B6判二九六頁  
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B6判八四七頁  
価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経

選訳集

B6判四七四頁  
価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選訳集

B6判三八七頁  
価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観経四帖疏

B6判五八四頁  
価三、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

B6判二六五頁  
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

雄秀 瀬村 編輯

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

寺 念 常 行 所 発

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番